

『信じる者となる』ヨハネ20:24-31

20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。

20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。

20:26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。

20:27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信する者は、さいわいである」。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

●序論

復活されたイエスさまの物語は、その出会いを通して、また言葉を通して、関わる人たちに新しい変化があったとヨハネは証言するのです。

今日、トマスに目を向けるのです。

20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。

残念な情景が目には浮かびます。このトマスの言葉にその思いを見せてくれているのです。

20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。

「決して信じない」という言葉に、彼の悲しみと孤独を感じます。

ここで今日の結論に触れておきます。ヨハネは告げています。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

トマスは放っておかれませんでした。復活のイエスさまは彼の前にあらわれ、その心を溶かしてくださったのです。

ここに、神さまの物語、そして神わざがあるのです。

●本論

I. イエスさまの願いは平安です

20:26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいってこられ、中に立って「安かれ（平和があなたがたにあるように）」と言われた。

それはあの復活の日の日曜日から時間を経て次の日曜日の出来事でした。

そこには復活のイエスさまとであった弟子たちと、トマスも一緒にいたとあります。想像できるのは、すこしそこには、弟子たちとの温度差にピリピリとしたトマスのありさまがあったのでは…ということです。

日曜日、わたしたちにとって、それは礼拝を想像させます。

一週間の歩みの中で、それぞれの思いと感情をかかえて集う場所がここに 있습니다。ある人は、喜び、感謝、慰め、感動を持ちつつ集う。しかし、人によっては、傷つき、悲しみ、ある人は恐れ、ある人はこわばった思い、ある人は疑い、ある人は悩み、ある人は怒りやいら立ちを抱えている。もしかしたらそうかもしれません。

その重荷のありのままを抱えてイエスさまのもとに明け渡す。それが礼拝です。

弟子たちのようにいまだ戸を閉めたままのような心の状態かもしれません。

いら立ちを抱えたトマスのような心がそこにあるかもしれません。

しかしイエスさまは、そんな集いの中に立って親しく祝福の言葉をくださいます。

それが、「あなたがたに平和（シャローム）がありますように」という言葉です。

弟子たちの幸い、トマスの幸いは、いろいろな気持ちを抱えながらも、週ごとにその集いと交わりの中にとどまり続けたということです。

そこに、弟子たちがいて、そしてトマスと一緒に聞くことができたのです。

II. トマスが信じるために

20:27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

あんなに心こわばらせていたトマスを知っていたくださった。わたしたちが心配していたトマスに言葉をかけてくださった。

ヨハネが記録するこの記事には、イエスさまがトマスに御声をかけてくださるこ

とに、心からの感謝と感動をもって見守る、彼と弟子たちの心が見て取れるように思うのです。

ヨハネはこの記事を書くにあたって、他の記事では記さないようなトマスの言葉や行動をこれまで少し触れることで、彼の人となりを示し、この物語の布石としてきました。

ひとつは、ある時イエスさまが危険な地に行こうとする際、彼の言葉を記録します。

11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。
まっすぐイエスさまと一緒に死ぬことさえも恐れない…という過激な言葉。

もう一つは、十字架の前夜、イエスさまに向かって

14:5 トマスはイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。

取り上げられたどちらの言葉も、素直でまっすぐすぎるトマスの思いをあらわす彼の言葉です。

さて、今日のところを振り返るとトマスは、言っていました。

「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。(：25)
「イエスの傷跡を見せろ！それに指を入れさせよ！」と、まっすぐな過激な言葉です。

一週間前のその言葉を、イエスさまはご存じで答えられたのだとわかります。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。…」
そして、厳しく責め立てるのではなく、やさしく言われたことを想像します。
「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と。

Ⅲ. 決め手は主の言葉です

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

トマスの心が和らげられた瞬間です。素直な信仰の告白の言葉でした。

復活のイエスさまと出会い、この方を、昔のように、いや昔よりもまさる思いを込めて「わが主よ、わが神よ」というふうに呼べる感動がここにあったのです。

そしてそんな彼にイエスさまは言われました。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信する者は、さいわいである」。

かつてトマスは、自分が完全に復活のイエスさまと出会うことを、その「傷跡」に触れることに求めていました。そうして「わたしは信じるのだ」と。いや、「そうしなければ信じない」とも宣言していました。

信仰においても、自分の完璧を目指す。それがわたしたちのありさまかもしれません。
ともすると、自分が信じたから、完璧に信じ切れたから、自分は救われて、偉い…というところに自分を置くことがあるのかも…それがトマスに見えるのです。

しかし実際には、そんな心の真ん中にイエスさまが来てくださることが、そして「平安があるように」と、御声を下さることで、わたしたちは癒され、回復され、救われていく、ことをトマスの経験に見えるのです。

「わたしの救いは、（わたしの側ではなく）イエスさまにある」。
それが、「わが主よ、わが神よ」とのまっすぐな告白につながるのです。

●おわりに）わたしたちが信じるために

古い賛美です。さびの部分覚えておられる方いらっしゃるでしょうか？

♪「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。～信じるなら、信じるなら、あなたは神の栄光を見る」

実はイエスさまは、だれよりも、信じない、信じられないでいるわたしたちの心のありさまをよくご存じです。

それはヨハネも弟子たちも、その挫折の経験を通して、よくわかるようになっていたことと思います。だからヨハネはこの福音書を、わたしたちのためにも記したのです。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

「しるし」は、わたしたちを、神の思いや神の御業、また神の栄光、神の物語に、心の目を向けてくれるものです。

何より十字架の死と復活という「しるし」は、わたしたちに、生ける神さまの熱烈な愛と心からの赦しを証言するものです。この方に目を向けましょう！

1ヨハネ4:10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。